

共同性基盤意味論からみたグライスのプロジェクト

浅利 みなと (Minato Asari)

東京都立大学

グライスの言語哲学は“Meaning” (1957) に始まる意図基盤意味論 (intention-based semantics) と呼ばれるプログラムに従事していた時期と、“Logic and Conversation” (1975) に代表される、会話の推意 (conversational implicature / 以降、単に「推意」) の分析を展開していた時期とに大別される。一般的な解釈に従えば、グライスのこの 2 つのプロジェクトは連続しており、推意は話し手の意味 (speaker meaning) の一部を構成するものとして解釈されてきた (Neal 1992; Bach 2012; Chapman 2013)。

この方針は、三木 (2019) の提唱する共同性基盤意味論でも踏襲されている (pp. 220-225)。従来、推意は話者と聞き手の意図の読み合いによって生じるとされてきた。しかし、共同性基盤意味論は、話者の意図の内容が話し手の意味と対応し、前者が後者を決定するという描像を破棄しているがゆえに、グライスが素描した推意の導出のメカニズムに頼ることはできない。それどころか、これまで蓄積されてきた推意についての様々な特徴付けや分析とそもそも折り合いをつけられるのかどうかも議論を必要とする事柄である。なぜなら、これまでの推意の研究において、推意される内容は話者の意図の内容と対応すると前提とされてきたからである。

こうした背景から、本発表では、共同性基盤意味論の枠内で推意を分析する際に生じるとされるいくつかの問題点と、それに対して共同性基盤意味論が取りうる解決策について論じる。まず、推意の取消可能性 (cancellability) を取り上げる。推意は必要条件の一つとして取消可能性をもつと考えられてきた。しかし、推意のこの特徴は、三木 (2019) が説明すべき事実として掲げる話し手の意味の公共性と矛盾するように思われる。

この問題に対する応答を検討するために、三木 (2019) が依拠している Lepore and Stone (2015) による推意の分析の大枠を紹介する。彼らは、これまで推意と呼ばれてきた現象は、規約に訴えるか、話者と聞き手の想像活動に訴えるかのいずれかによって、説明されるべきであり、従来理解されているかたちでの推意というカテゴリーは不要である、という大胆なテーゼを掲げており、言語哲学者・言語学者たちのあいだで論争を引き起こしている。本発表では、ルポア&ストーンが「規約的 (conventional)」と呼ぶ推意の側面に関して、従来は取消と考えられてきた現象を、話し手の意味の公共性と矛盾しないかたちで取り込むのであれば、共同性基盤意味論は最小意図説を弱める必要があると論じる。

より重大な問題は、隠喩や皮肉といった、ルポア&ストーンが「想像的 (imaginative)」と呼ぶ推意の側面であると思われる。推意には想像的側面があるという彼らの指摘はもっともなのではあるが、Szabó (2016) や Harris (2016) が指摘する通り、彼らの説明

に従うと、話し手は隠喩や皮肉によって何も意味していない、という帰結が待っている。この帰結はそれ自体でかなり非直観的であり、共同性基盤意味論がそのままルポア&ストーンの枠組みを利用するのは難しいだろう。また、彼らの推意の分析の規約的側面だけを採用するとしても、共同性基盤意味論が隠喩や皮肉をどのように説明するのかは不透明なままである。

本発表では、隠喩や皮肉の想像的側面を認めつつ、極端な帰結を避けるために、代替案としてマイケル・ホーが提示している、「事後的な意図 (*post fact intention*)」という概念に訴えることを提案する (Haugh 2008, 2018)。彼の議論が興味深いのは、意図を話者が発話前に抱く何らかの心的状態としてではなく、発話後に行為説明のために事後的に構成されるものとして捉えているという点である。この事後的な意図という概念で、推意の想像的側面がどのように説明されうるのか、そして、この意図概念を共同性基盤意味論の枠組みに組み込むことが可能かどうかを論じる¹。

- Bach, K. (2012). "Saying, Meaning and Implicating." K. Allan and K. Jaszczolt (eds.), *Cambridge Handbook of Pragmatics*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 47-68.
- Chapman, S. (2013). "Grice, Conversational Implicature and Philosophy." in A. Capone, F. L. Piparo and M. Carapezza (eds.), *Perspectives on Pragmatics and Philosophy*, New York: Springer, pp. 153-188.
- Grice, P. (1957). "Meaning." *The Philosophical Review*, 66(3), pp. 377-388.
- . (1975). "Logic and Conversation." in P. Cole, and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics, Vol. 3: Speech Act*, New York: Academic Press, pp. 41-58.
- Harris, D. (2016). "Intentionalism versus The New Conventionalism." *Croatian Journal of Philosophy*, 16(2), pp.173-201.
- Haugh, M. (2008). "Intention in Pragmatics." *Intellectual Pragmatics*, 5(2), pp. 99-110.
- . (2018). "The Interactional Achievement of Speaker Meaning: Toward a Formal Account of Conversational Inference." *Intercultural Pragmatics*, 15(5), pp. 593-625.
- Lepore, E and Stone, M. (2015). *Imagination and Convention: Distinguishing Grammar and Inference in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Neal, S. (1992). "Paul Grice and the philosophy of language." *Linguistics and Philosophy*, 15, pp. 509-59.
- Szabó, Z. (2016). "In Defense of Indirect Communication." *Inquiry*, 59(2), pp. 163-174.
- 三木那由他 (2019) 『話し手の意味の心理性と公共性』勁草書房

¹ なお、このような意図概念の可能性は、三木 (2019) においても言及されている (p. 256)。